

<資料紹介> ILOコレクションの受贈について

榎, 一江 / ENOKI, Kazue

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

779・780

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

79

(発行年 / Year)

2023-10

ILO コレクションの受贈について

榎 一江

2023年6月27日、国連大学図書館に所蔵されていたILO駐日事務所寄託資料（ILOコレクション、480箱）が法政大学大原社会問題研究所の地下書庫に搬入された。1923年に設立されたILO駐日事務所は2023年に創設100周年を迎えたが、この機関が収集してきた資料群を受贈するに至った経緯をここに記しておきたい。

発端は2009年、大原社会問題研究所90周年記念フォーラムの祝賀会まで遡る。その際、国際労働問題シンポジウムを共催しているILO駐日事務所の長谷川真一代表（当時）と早川征一郎名誉研究員との間で、ILO関係資料の移管（寄贈）に関する話がでたという。そのため、資料内容を確認すべく、2009年12月15日、研究所に着任したばかりで同シンポジウムを担当していた筆者は、早川征一郎名誉研究員とともにILO駐日事務所を訪問し、国連大学図書館に寄託されているコレクションを見せていただいた。早川名誉研究員は、研究所の蔵書にILOコレクションが加わることの意義を熱心に説き、研究員の間でもおおむね賛同を得ていたと記憶しているが、当時の駐日代表はILOコレクションを手放すことまでは考えておらず、比較的新しい重複資料のみの寄贈を打診されたため、お引き受けすることはできなかった。

2022年に至り、改めてILO駐日事務所から寄贈に関する相談があり、7月12日に資料担当として筆者が国連大学図書館を訪問し、司書から資料概要やデータ移行について説明を受けるとともに、ILO駐日事務所にて高崎真一駐日代表と会談した。ILO駐日事務所では職員の退職に伴い、ジュネーブからの図書受入れ業務の引継ぎ過程でILOコレクションの移管問題が再燃したとのことで、寄贈の意向とともに重複図書のリサイクル・処分についても一任してもらうことを確認した。幸いにも、ILOコレクションの受贈は研究所事務会議で了承され、資料の輸送のみならず、梱包・配架作業も業務委託することによって速やかに資料移管が実施された。研究所では、伊東林蔵兼任研究員、中村美香研究業務補助員がこの受入作業を担当した。

今回の資料移管で地下書庫にある書架はほぼ埋まってしまう、研究所にとって収蔵庫の拡充は喫緊の課題となった。加えて、この資料群をどのように活用できるかも問われている。まずは、再整理を行い、研究所データベースで検索可能な状態にして一般公開する予定だが、すでにILOと日本との関係を研究したいというプリンストン大学の大学院生や港湾・海上労働を専門とする海外の研究者からの問い合わせに、このコレクションをご紹介している。専門図書館・資料館としての研究所にILOコレクションが加わることによって、社会労働問題の研究拠点として一層の充実を図ることができたといえよう。引き続き、ILOコレクションのみならず所蔵資料を活用した研究を広く推進していきたい。

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授）